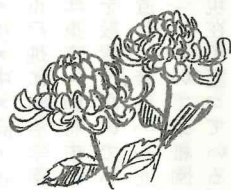


仙台司教区 教区事務所だより



(第 60 号)
昭和57年10月1日

老人福祉は福音の実践

尊敬をこめて高齢者に接しよう

九月十五日の敬老の日の前後は、ラジオやテレビ、新聞などがこぞって老人福祉の問題を取り上げていた。いまや高齢化社会の日本では、誰もが老人福祉の問題にかかわることを避けることができなくなった。ところがわが仙台教区には、次の五つのカトリック系老人福祉施設がある。

- ① 特別養護老人ホーム 暁星園（仙台）
藤の園（青森）
- ② // 弘前大清水ホーム（弘前）
- ③ // 養護老人ホーム 藤ホーム（青森）
- ④ 軽費老人ホーム あけの星荘（仙台）
- ⑤ いずれもキリストの福音の教え、愛の精神をかかげて、職員やボランティアが心をあわせ、お年よりを世話している。たいへんな仕事だけに、日ごろのご苦労に感謝しよう。

老人福祉の福音的考え

老人福祉の問題の多くは、解決が容易でないようだ。人間は年をとり、心身ともに不自

由になってゆくのが自然の理というもの。むしろ高齢化に伴う不都合を押し返そうという発想より、人間の衰えという自然の理をみとめて、その流れにそった手助けをしようという考えの方が、よりキリスト教的である。

また、ご自分に似せて神がお造りになった人間であるという認識なしに、私たちは高齢者を正しく見ることはできないであろう。お年よりは高齢化社会の、単なる老人たちではない。一人ひとりが私たちのかけがえのない父であり母である。敬愛すべきおじいさんでありおばあさんである。

このような発想は、行政や施設に働くかたたちによりいつそう理解してほしいが、私たち自身もまた周囲のお年よりに、積極的に手と心をさしのべねばならない。とくに、人間について靈魂の存在と生命の尊厳を主張する私たち信者は、老人福祉を通じて社会にあか

高齢司祭の処遇

高齢化社会の日本にあつて、教会もまたひとつの問題をかかえている。高齢司祭の処遇にかかわることである。明治の再宣教後すでに百年以上をへて、日本人司祭の高齢化が進み、各教区が対策をいそいでいる。

福音宣教に生涯をささげた高齢司祭は、そのゆえに尊敬され、余後の配慮に欠けることがあつてはならない。司祭職の尊厳からも理解することができる。これが高齢司祭処遇の理念となるべきだろう。またお年よりの司祭に対する暖かい配慮は、青少年の司祭召命に大きな励ましとなるはずだ。

仙台教区の高齢司祭処遇の問題は、いずれ具体化したかたちで全信者に示されることになろう。家庭をもたない司祭の老後は、司祭も信徒も一体となつて教会が考えなければならぬ、老人福祉の問題である。

司教日程

（9月17日現在）

- 10月17日 野田町教会堅信（福島）
- 19～21日 宮宗法連研修会
- 25日 教区司祭団月例会
- 31日 愛心幼稚園落成式（一関）
- 11月1日 教区司祭団役員会
- 3日 気仙沼幼稚園落成式
- 4～5日 神学校常任委員会（東京）
- 5～6 中央協。財務委員会
- 7日 塩町教会堅信（八戸）
- 8日 司祭評議会（仙台）



アフリカ難民
救援募金に
協力しよう

へ9月から
4ヶ月間



カリタスジャパンでは、難民を受け入れている国々に少しでも協力できるよう、第三回アフリカ難民救援キャンペーンを行うことになった。期間は9月から四ヶ月間である。

いま、世界の難民（国際紛争、国内紛争、及び人種国籍、宗教、政治的信条等が原因で迫害を受ける恐れがあり、また種々の災害で祖国を離れ避難している人々）の内、約半数はアフリカ人。アフリカの国々では難民を保護する国際条約を尊重し、避難して来た人々を暖かく迎えているが、受け入れる国自身が貧しいので十分助けることができない。

アフリカ諸国が他国からの難民に対する救援活動を十分行うことができるよう、各教会での協力がのぞまれている。なお、第一期では五千二百万円、第二期では、九千八百万円、の募金が全国から集まった。

来日五十周年を祝う

コングレガシオン・ド・ノートルダム

コングレガシオン・ド・ノートルダム（本部カナダ・モントリオール）が日本で宣教を

開始して今年で五十年になる。

同会は、来日五十周年を記念して去る8月17日午後2時から、記念式典を、東京・調布本部修道院で行った。白柳誠一東京大司教が主司式者になり、教皇大使、マリオ・ガスパリ大司教、佐藤千敬仙台司教ら6人の司教をはじめ、多数の司教によつて捧げられた感謝の祭儀で約二百人の参列者は、心をひとつにして神の慈しみと愛を賛えた。ミサ中、一九三二年に第一陣として来日した五人のシスターの内の一、シスターローズ・コーションが、ガスバリ大司教を通して教皇祝福を与えられた。

同会は一六五七年、福者マルグリット・プーールジョワ修道女（今年十月に列聖予定）によつてカナダで創立、現会員は二千七百人。日本管区には八十人（カナダ、米国人十五人）将来を担う志願者六人が修練中である。

一九三二年当時仙台教区を担当していたカナダのドミニコ会の招きを受けて、五人のカナダ人シスターが福島市に派遣されて五十年、第二次世界大戦を始め、多くの試験に遭遇しながらも修道会の使命である「教育」を通して教会への奉仕を目ざし、一九四六年福島に桜の聖母学院（幼・小・中・高・短大）を創設、四九年北九州市戸畑に明治学園（小・中高）更に一九五六年東京・調布市に、幼稚園女子寮、英語教室を設置。次いで小教区司牧活動にも会員を派遣し、奈良（一九六八年）大分（一九七〇年）において幼稚園を通しての使徒職に献身、現在に至っている。

同会では記念式典の他、創立者の精神を中心とした祈りと分かちあいの週間を持ち、創立者マルグリット・ヴールジョワの娘として聖母に倣い、教育を通して福音を告げる使命への熱意を新たにしたい。なお、福島支部においても来る10月10日、福島・松木町教会において記念式典を行う予定である。

★お元気で！

スイスに帰国のルカ神父様

★ようこそ

再来日のハイメ神父様



ベトレヘム会のルカ・ストップフェル神父、（北上教会主任）は、9月末スイスへ帰国することになった。今年69才の同神父は、在日三十二年の大半を岩手県の各教会で働き、その間管区会計、管区長を歴任した。スイス本部では主に祈りの生活が中心となる。ルカ神父の長年の日本での働きに感謝し、今後の新しい生活のため祈ろう。

グアダルーベ会のハイメ・ラレス神父は、9月に再来日、数ヶ月日本語の勉強をした後、福島県のグアダルーベ会宣教地区で司牧にあたる。ハイメ神父は五年前まで東京カトリック神学院で勉強、その後帰国してメキシコで司祭に叙階、今回再び日本で働くため来日した。若手司祭が多くなることは、教区にとつても力強く喜ばしいことである。

'82年間目標

家庭から社会に
キリストの平和を
（仙台教区）

三冊目の著書
「青森県とカトリック」出版
喜寿を祝う 小野神父様

東北地方の教会史の研究者として有名な、小野忠亮神父は、このたび青森宣教百年史、「青森県とカトリック」を百年史出版委員会（青森・本町カトリック教会内）から出版した。同書は青森県内各教会の歴史だけでなく修道会、学校、福祉関係、そして思い出深い信徒の活躍まで数々のエピソードを交えて書かれており、百年間の日本の歩みや社会情勢を背景に、宣教の歴史が克明に記されている。

小野神父は昨年4月司牧の第一線から退いて以来、青森の藤の園マリア院付司祭として老人の霊的指導のかたわら執筆活動を行っており9月28日、77才の誕生日を祝ったばかり。「青森県とカトリック」は「北日本カトリック教会史」（昭和45年中央出版社）「フォーリー神父」（昭和52年、キリシタン文化研究会）に次いで三冊目の著書で、仙台教区だけでなく、日本カトリックの歴史にとっても、貴重な資料である。

終生誓願おめでとう！

聖母被昇天修道会（青森）



去る8月15日の聖母被昇天の大祝日に、青森の聖母被昇天会では二人のシスターの終生誓願式が行われた。立誓願者は青森出身の対島栄子、東京出身の根本のぶ子の両修道女。

誓願式は佐藤千敬司教を主式者に、小野忠亮神父とR・ベルニエ神父の共同司式で壮厳に行われ、ミサ中、神の選びに對し、生涯誓願に忠実に生きることを約束した。

式後、明けの星短大ホールで祝賀会が開かれ、家族、知人そして同修道会会員がこぞつて、立誓願者をかこみ喜びを共にした。

聖母被昇天修道会は、青森、弘前、浦和、に修道院を持ち、幼稚園、高校、短大を経営、女子教育を通して宣教活動を行っている。

被爆者招き体験を聞く

盛岡、三教会合同の平和旬間

日本司教団は、8月6日から15日までを平和旬間として世界平和のため祈るよう各教会に呼びかけたが、盛岡の四ツ家、上堂、志家の三教会では、それにこたえて祈りと戦争体験を聞く集いを行った。

平和旬間の初日8月6日には午後6時から岩手カトリックセンターで平和のためのミサを捧げ、そのあと広島職町教会所属山口裕子さんの被爆体験を聞いた。山口さんは広島の中学生の手で作られたスライド「平和への道」を上映しながら自分の体験を語り戦争の悲惨さを訴えた。長崎被爆のあった9日には正午に平和のミサ、続いて長崎造船所に勤め、原爆投下を目撃した盛岡市民の中軽米美徳さんの話を聞いた。15日には9時のミサをすべての戦争犠牲者のために捧げ、その後戦争体験を語る盛岡市民の集いを行い、全市民的レベルで平和への道を歩もうと確認し合った。

「暁星園」でも
敬老の日を楽しむ



特別養護老人ホーム「暁星園」（理事長佐藤千敬司教）では9月19日の敬老の日から一週間を敬老週間として入園しているお年寄りのためいろいろ催しを行った。

9月15日には75才以上のお年寄り28人に仙台市から、また85才以上の9人の方々には、宮城県からそれぞれお祝いの品が届けられ、本間重治園長から手渡された。同日、町内の子ども会やボランティアグループが次々に慰問、また暁星園職員による劇「森の石松」の上演などが入園者を喜ばせた。入園者の家族も多数訪問、各部屋では園のお祝いのおすしや家族の手みやげが食卓を賑わせていた。また入園者の家族と園関係者との懇談会がありよりよい老人福祉について話し合い、かねてから家族の要望であった広報紙「暁星園」創刊が報告された。なお期間中の行事には多くの催しが行われ、たくさんのボランティアが参加した。主な行事は次のとおりである。
16日〜日赤共同募金会の視察。17日〜映画上映「あばれん坊森の石松」 19日〜模擬店
20日〜合同慰霊祭 21日〜誕生会
暁星園には現在50人の入園者がおり約20人は寝たきりで、13人の寮母（内三修道会から5人のシスターが働いている）が日夜献身的に介護に当たっている。



わが八戸、鮫教会老若男女三十人の「草刈りキャラバン隊」は、8月6日午後7時、マイクバス二台に分乗して仙台に出発した。仙台の司教館の庭が毎年夏になると雑草がひどいと聞き、半年も前から案を練り、巡礼と七夕見物を兼ねて、草刈りキャラバン隊を結成したのである。

夜の国道4号線をひたすら南下、仙台に着したのは七日の午前0時30分。司教様が出迎えてくださった。天気はどうかかと気にしながら宿舎の元司祭会館でしばらく仮眠して五時に全員起床。第一の目的である草刈作業開始。途中から塩釜教会の有志も加わり能率が上がる。午前7時に東仙台教会で司教様のミサ。聖母マリアに意向を捧げる。ミサ後の朝食で体力を回復、作業開始。この時から八戸から持参した草刈機が登場し、見る見るうちに刈り込んでいく。司教様も作業服姿で参加。八戸出身のオタワ愛徳会のシスター赤坂も手伝いに来る。小学生は草運びに一生懸命。沢山の人の手で、司教館周辺は、あつという間にきれいになってしまった。

第一目的を無事達成し、心身共に充実感に満たされた私達は、夕方皆さっぱりした晴着姿で（中にはゆかたに下駄を準備したイキなお母さんも）三三五五七夕見物に街に向った。

午後六時から、三教会（東仙台、塩釜、鮫）合同交流会が始まった。司教様はじめ、平田、笹気、首藤、渡辺の各神父様と三教会からの有志を含め七十人、まさにミニ信徒大会である。子供たちは庭で花火大会をする。大人はほどこよいアルコールの助けで次々にカラオケのマイク片手に歌が飛び出す。いよいよ真打登場、司教様の水戸黄門の「葵の紋」が出るに及んで会は最高潮に達した。予定時間を大巾に過ぎた9時30分「アーメン・ハレルヤ」の大合唱のうち、再会を約束して三教会合同交流会は終了した。

翌朝、広瀬川殉教碑前で、先人の遺徳をしのびながら聖歌と祈りを捧げ小雨けむる仙台に

★大野アヤ水彩画小品展
日時 57年10月9日(土) 午前10時から
10月17日(日) 午後7時まで
場所 岩手カトリックセンター
四ツ家教会(盛岡市本町通二丁目12-25)
入場無料(大野アヤ氏はカトリック美術協会会員で秋田県出身)

★黙想会
「主よ、私はどうしたらよいのでしょうか」
日時 10月2日(土)午後5時から
10月3日(日)午後3時30分まで
場所 シャトル聖パウロ修道女会

別れを告げ帰途につく。途中一関教会を訪問鮫教会前任の鷹嘴神父様となつかしい再会をした。一緒に、ミサにあずかり教会の方々の心づくしのもてなしを受け、一関を後にした。花巻温泉で昼食を取り、8月8日午後7時無事鮫教会に到着した。

一同は、ただ「ヤッター」という思いがいっぱい。長いようで短かった二日間が終った。今回の「草刈行」は有形、無形の教訓と恵みを山ほど私達に与えてくれた。目標に向かって一致協力する尊さ。各教会の方々の暖かい愛に支えられて大きな仕事を成し終えた喜び。「祈りと労働」の意味、その真髄をも体験したように思う。

おしらせ

仙台白百合学園
仙台市本町一七七一
指導 笹気直哉神父 対象・女性
詳細はシャトルの聖パウロ修道会
☎0222(22)5741

★黙想会 「私のまねかかっている道」
日時 11月13日(土)5時から
11月14日(日)4時まで
場所 聖ウルスラ会修道院
仙台市一本杉町の一
指導 田・ペロー神父(ドミニコ会)
対象 未婚女性
詳細は聖ウルスラ会Stオロールまで
☎0222(86)2355

読者のページ

*夏期学校に参加して

大湊教会 吉田桂子(小六)

7月24日、横島神父様の、「呼びかけに応えて」という話をお聞きしました。呼びかけというのは、神さまが私達にやつてもらいたいことを心の中に呼びかけてくれることです。応えてというのは、神さまがせつかく呼びかけてくれたのに、いうことを聞かないとだめ、ということですよ。

それからまずしい人のために働いたコルベ神父さまや、マザーテレサの話をお聞きしました。マザーテレサはインドに行って道にたおれている人を助けた人です。また「窓ぎわのトットちゃん」の話も聞きました。トットちゃんが友達達のやすあきくんをかばった話です。やすあきくんは小児マヒで足がおかしくなっているのです。それをほかの人がからかったのをトットちゃんがかばったのです。とつても勇気があると思いました。呼びかけに答えられる人は、トットちゃんみたいな人だそうです。神父さまのお話はとてもためになりました。

*ヤング・トレニングに参加して

本町教会 永井明子(高一)
私にとつて初めての大清水老人ホームでのヤング・トレ、青森の各地から集まった高校生の夏期合宿である。一日中やつたおしめたたみ。赤ちゃんのおしめとは違い、とてもぶ厚くてびっくりした。お誕生会では、おばあち

やん達と握手をし、涙を流して喜こんでくれるおばあちゃんもいてシーンときた。おじいちゃん部の部屋に二人ずつ組になりお世話することになった。最初は何をどう話したらいいかわからず寝たきりの老人を世話するのが、どんなに大変かよくわかった。おじいちゃんが「ベンジョ」といったので寮母さんに話して連れて行った。おじいちゃんのズボンを脱がせてトイレに座わらせた。終つて、おしりをふいてあげなくちゃと思つたが、はつきりいつてすぐく気が悪くなり、もどしそうになつた。そこへ寮母さんが来て、さつとふいて終つた。偉いなあと思つた。おじいちゃんとはとてもうれしそうだった。

ヤング・トレに参加して今までの自分の考え方が少し大人になつたような気がする。そしておじいちゃん、おばあちゃん達とも友達になれて、とてもいい経験であつた。

*ヤング・トレに参加して

浪打教会 藤元 由美(大学一年)
二度目のヤング・トレに参加して、このホームで生活する老人に対して昨年のように可愛らしいのだと思ふ感情は消えたような気がする。老人よりも、むしろその周囲で働く人間の心を感じながら過してきたように思う。各々精一杯の心と身体を使って老人に接している姿をこの目でしっかりと見た。ある老人は、「ここに来てとてもしあわせです」と言つていた。風呂上がりの老人達の顔が忘れられない。いづれ私も年老いていくだろう。その時、私のまわりには、どんな人が居てくれるだろうか。



「看るとは手と目だとわかつた。看護とは血の通つた手と暖かい心の眼が組み合わされたもの。」「ぼけ老人をかかえて(合同出版)の編者のことばである。

「一日に何度も何度も失敗する排尿の後始末に疲れ果て、夜も二時間おきには様子を見なければふとんまでズクズクに汚されてしまう。着替えを拒んで暴れる人に、まるで格闘するようにして着替えさせる。こんなことを毎日毎晩やつていたら睡眠不足と疲労のためにこちらがたおれてしまう、どんなにまじめに掃除や洗濯をしても家の中には異臭がこもり、家庭の雰囲気もメチャメチャにこわれる怖れさえある。」

すさまじい、としか形容しようがない体験記が次から次へと繰りひろげられている。介護者の中には、永い苦闘の末、悟りとも言えるような境地に達している人がいる。「ぼけ老人の悲しみ、誇りを知ることが大切です。人間としての心の動きを全く無視して、介護者側の理屈だけを押しつけることはぼけをますます進ませることになりません」と。

福祉行政が後退しつつある今日の日本にあつては、介護者達の苦勞はまだまだ続きそうである。(狼河原)



会津若松は、万葉集にも会津嶺の歌が見られる程、古い歴史と伝統のある町です。白虎隊の殉死はあまりにも有名ですが、日本のキリスト教の歴史からも東北伝道の始まりの地として重要な意義を持っています。

約三百年前(天正十八年)伊勢松阪から転封された蒲生氏卿は、高山右近と親交があり、レオの霊名で受洗、氏郷の家臣や民衆にも信徒が多く会津から信徒を派遣して米沢に教会を建てたとイエズス会の報告にあります。秀吉の迫害の時も、氏郷は信徒に寛大でしたが寛永に入り会津各地でキリシタンの処刑が行われ、多くの信徒が殉教しています。今から二十数年前、処刑跡の薬師川原で教体の人骨が発掘され、古老の証言でキリシタンの骨と確認されました。教会ではこの土地を譲り受け、キリシタン塚を建立。毎年この塚の前でミサを捧げ、殉教者の偉徳をしのんでいます。

禁教令の解かれた明治初年、いち早く会津

禁教令の解かれた明治初年、いち早く会津には再布教の火が点され、東京からはるばる伝道の為に神父が来られました。翌年、明治十八年に、後の函館司教となられたベルリオーズ神父が民家を借りて、聖堂と司祭室とされたのが現在の教会のはじめで、当時の玄関口や内部が現聖堂に隣設して残っています。現聖堂も既に七十年を経ており、高いフランス風の建物の内部は畳敷きとなっています。当時は函館教区に属し代々バリ外国宣教会の司祭が司牧に当たっていました。

昭和になって、マリオン神父の後、昭和六年、後の東京大司教、土井辰雄枢機卿も主任司祭として赴任、伝道館を新築して、青年の教育や信徒の一致に力を注ぎ入信者も従来より、かなり多数にのぼったといわれています。

昭和八年には、教会の隣に無原罪聖母会が修道院を建設、幼稚園も開設しました。戦時中は、軟禁状態の中でシスター達も苦しい生活に耐えられ、当時の信徒達は隠れて援助していたそうです。戦後同修道院では、ザベリオ学園を開設、現在は幼稚園から高校までの当地では唯一のミッション・スクールとして多くの子女を教育、卒業生からも多くの信徒がでていきます。

昭和九年、ドミニコ会のローラズ神父が赴任、地方にも巡回し教会発展の基礎を築かれました。戦後になり深沢守三神父が司牧、当時の学生達が受洗し現在、教会の中枢となっています。ドミニコ会のベリヴォ神父は、その深い信仰と学識をもって若い信徒達を熱心

に指導。後に九州大学の哲学講師としても活躍しました。その後赴任したクツール神父はキリシタン遺跡に深い関心を持ち、キリシタン塚建立の先鞭を取られました。

昭和三十三年、会津地区はメキシコのグアダルーベ宣教会の宣教地になり、リオス、サルミナ、ガルニカ三神父が赴任。現在本部は、須賀川に移っています。

現在の主任司祭和泉神父は、来日十年、日本を愛し、会津に骨を埋める決心をし、二年前に日本に帰化し、和泉邦安となり、司牧にあたっています。

今、教会では、教会委員会が信徒会の運営に当り、壮年、婦人、青年の各会と、典礼、社会の各部が連携して、一致と発展を図り、市内を数地区に分けて地区協議会を作り、横の連絡を密にしようとしています。また「若い夫婦の会」や、聖書を読む会もあります。

助任のエストラダ神父は十一年前YAU会津文化センターを創立、英会話等の教養講座とスポーツと聖書研究等のクラブ活動があり、信徒になる若者もふえています。

いま、会津若松教会は、創立百年祭を三年後に控え、先人の殉教を無にすることなく歴史と伝統を大切にしながら新しい信仰の時代を築くべく張り切っています。(渡辺稔記)

仙台司教区事務所だより第60号
 昭和57年10月1日発行
 発行所 仙台司教区事務所
 980仙台市本町一丁目2番12号
 TEL 0222 22 7371